

マルクス=エンゲルス選集

第四冊

マルクス＝エンゲルス選集

ソ同盟共産党中央委員会付属 編
M・E・L・S 研 究 所
M・L 主 義 研 究 所 訳

第 四 冊

大 月 書 店

昭和30年9月27日 第1刷発行

印
し
た
い
換
ま
せ
ん

訳者 マルクス＝レーニン
主義研究所
発行者 小林直衛
印刷者 山田 博

発行所 大月書店

東京都文京区本郷1の15
電話(92)3091・7887
振替 東京 16387

三陽社印刷・田中製本

目次 第四冊

賃金、価格、利潤（マルクス）……………一

〔まえおき〕……………二

一〔生産と賃金〕……………三

二〔生産、賃金、利潤〕……………七

三〔賃金と通貨〕……………二一

四〔供給と需要〕……………二七

五〔賃金と価格〕……………三〇

六〔価値と労働〕……………三四

七 労働力……………三八

八 剰余価値の生産……………五三

九 労働の価値……………五五

一〇 利潤は商品をその価値どおりで売ることによって得られる……………五九

一一 剰余価値が分解する種々の部分	六〇
一二 利潤、賃金、価格の一般的関係	六五
一三 賃金引上げの企て、または賃金引下げ阻止の企ての主要な場合	六九
一四 資本と労働との闘争とその結果	七六
『資本論』第一巻初版序文（マルクス）	八九
『資本論』第一巻第二版のあとがきから（マルクス）	九八
資本主義的蓄積の歴史的傾向（マルクス）	一〇七
マルクスの『資本論』〔書評〕（エンゲルス）	一二三
『資本論』第二巻序文から（エンゲルス）	一二七
フランスにおける内乱（マルクス）	一三三
エンゲルスの序文	一三四
フランス・ロシア戦争についての国際労働者協会総評議会の	
第一の呼びかけ	一五五
フランス・ロシア戦争についての国際労働者協会総評議会の	

第二の呼びかけ	一六三
一八七一年のフランスにおける内乱についての	
国際労働者協会総評議会の呼びかけ	一六六
一	一六六
二	一九二
三	二〇四
四	二三九
注	二五一
解説	二五七
人名注	
事項注	

賃金、価格、利潤

カール・マルクス

「まえおき」

諸君、

本論にはいるまえに、すこしまえおきを言わせていただきたい。

いま「ヨーロッパ」大陸では、文字どおり流行病のようにストライキがひろがり、いたるところ賃金上げを要求する声がひびきわたっている。この問題は、われわれの大会で討議されるであろう。国際「労働者」協会の幹部である諸君は、このもっとも重要な問題について、当然ゆるぎない信念をもっていなければならぬ。したがって私としては、たとえ諸君に辛抱しきれない思いをさせるとしても、それを覚悟のうえで、この問題を十分に検討することが自分の義務だと考えたのである。

私はもう一つのまえおきを、ウェストン君について言っておかなければならない。彼は労働者階級にもっとも評判のわるいことを自分でも承知している意見を、労働者階級のためだと考えて、諸君に提出しただけでなく、公然と弁護してきた。このように勇気をしめしたことにたいしては、われわれ一同は大いに敬意をはらわなければならない。私はあけすけな言葉でこの講演をするが、その結論においては、彼の主張の根底にあると思われるただしい考えと私が一

致していることは、彼もわかってくれるものと思う。ただ、彼の主張は、いまのままの形で、理論的には誤りであり、実践的には危険である、と私は考えざるをえない。さて、ただちに当面の問題にはいろう。

一 「生産と賃金」

ウエ、ストン君の議論は、じつは二つの前提にもとづいている。第一に、国民生産物の額は固定したもの、数学者がよく言う不変の量または大きさだということであり、第二に、実質賃金の額、すなわち賃金で買うことのできる商品の量ではかった賃金の額は、固定した額であり、不変の大きさであるということである。

ところで、彼の第一の主張はあきらかにまちがっている。年々、諸君が気づかれるとおり、生産物の価値と分量は増加し、国民労働の生産力は増大し、この増大する生産物を流通させるのに必要な貨幣額はたえず変動している。一年の終りについて、またいろいろな年をたがいに比較した場合について真実なことは、一年の各平均日についても真実である。国民生産物の額はまた大きさは、たえず変動する。それは、不変の大きさではなくて可変の大きさである。人口の変動はべつにしても、そうでなければならぬ。資本の蓄積と労働の生産力はたえず変動

するのだからである。かりにきょう、一般的賃金率の上昇がおこったとしても、その上昇は、将来の結果はとにかく、それだけで直接に生産額を変化させるものではないということは、まったくくだしい。それは、まずはじめは、現存の状態から出発するはずである。しかし、賃金の上昇以前に国民生産が可変であって固定してはいないとしたら、それは賃金の上昇以後もひきつづき可変であり固定してはいないはずである。

けれどもかりに、国民生産物の額が可変ではなくて不変だとしてみよう。その場合でさえ、わがウェストン君が論理的帰結だと考えているものは、やはりいわれのない主張にとどまるであらう。たとえば八という一定の数があるとすると、この数の大きさには絶対的限界があるが、だからといってこの数の諸部分の大きさの相対的限界がかわらないということはない。利潤が六で賃金が二だったとしても、賃金が六にふえ、利潤が二にへって、しかも総額はやはり八でありうるのである。このように、生産額が固定しているということは、けっして賃金額が固定していることの証明にはならないはずである。では、わがウェストン君は、賃金額が固定しているということをどのようにして証明するか？ ただそう主張することによってだ。

しかし、かりに一歩ゆずって彼の主張がただしいとしても、彼はそれを一つの方向だけにおしすすめているが、じつはそれは両方の方向に通用することである。もし賃金額が不変の大きさだとすれば、それはふやすこともへらすこともできない。だから、もし労働者が賃金の一時

的引上げを強要することがおろかな行動だとすれば、資本家が賃金の一時的引下げを強行すること、これにおとらずおろかな行動だろう。わがウェストン君も、一定の事情のもとでは労働者が賃金の引上げを強要できることを否定はしないが、しかし彼は、賃金額は自然に固定しているのだからその反動がつづいておこらないわけにはいかぬ、と言うのである。ところが、彼は他方ではまた、資本家が賃金の引下げを強行できること、事実たえず強行しようとしていることを、承知している。賃金不変の原則にしたがえば、この場合にもまえの場合とおなじように反動がおこらなければならない。だから、賃金引下げのくわだてや事実にないする労働者の反対行動は、ただしい行動であるはずだ。だから、労働者が賃金引上げを強要するのはただしい行動であるはずだ。なぜなら、賃金引下げにたいする反対行動はすべて賃金引上げを要求する行動だからである。したがって、ウェストン君自身の賃金不変の原則にしたがえば、労働者は、一定の事情のもとでは、賃金引上げのために団結してたたかうべきだということになる。

もし彼がこの結論を否定するなら、彼はこの結論をうみだす前提をすてなければならない。彼は、賃金額は不変量だ、と言ってはならない。むしろ、賃金額は、上昇できないしまた上昇してはならないが、資本がそれを引下げたいと思うときにはいつでも下落できるしまた下落せざるをえない、と言わなければならない。もし資本家が諸君に、肉のかわりにじゃがいもを、小麦のかわりにからす麦をくわせておきたいと思うなら、諸君は彼の意志を経済学の法則とし

てうけいれ、これにしたがわなければならない。ある国の賃金率がほかの国よりも高い場合には、たとえば合衆国ではイギリスよりも高い場合には、諸君はこの賃金率のちがいを、アメリカの資本家の意志とイギリスの資本家の意志とのちがいによって説明しなければならぬ。この方法なら、経済現象の研究だけでなく、ほかのあらゆる現象の研究も、はなはだしく簡単なものになってしまうだろう。

だが、その場合でさえ、われわれはこう質問することができよう。なぜアメリカの資本家の意志はイギリスの資本家の意志とちがうのか？　そして、この質問にこたえるためには、諸君は意志の領域のそとにでなければならぬ。神の意志はフランスとイギリスではべつだ、と言う人もあるだろう。もしこの人に、神の意志が二つあるわけの説明をもとめるとすれば、彼は、フランスとイギリスではべつの意志をもとうとするのが神の意志だ、とあつかましい答をするかもしれない。しかし、わがウェストン君が、けっしてこのように合理的な考え方をすべて完全に否定しざる議論をするような人でないことは、たしかである。

資本家の意志は、たしかに、できるだけ多く取ることである。「しかし」われわれがしなければならぬことは、彼の意志を論じることではなくて、彼の力、この力の限界、この限界の性格を研究することである。

二 「生産、賃金、利潤」

ウェストン君がわれわれに聞かせてくれた講演は、おそらくほんのひとことに要約できたであらう。

彼の議論のすべては、要するにつぎのようなことだ。もし労働者階級が資本家階級を強要して、貨幣賃金の形で四シリングのかわりに五シリングを支払わせるならば、資本家はそのかわりに商品の形で、五シリングの価値でなしに四シリングの価値をよこすであらう。労働者階級は、賃金引上げ以前には四シリングで買ったものに、五シリングはらわなければならなくなるであらう。だが、なぜそうなるのか？ なぜ資本家は五シリングとひきかえに四シリングの価値しかよこさないのか？ 賃金額は固定したものだから、と言う。しかし、なぜ賃金額は四シリングの価値の商品に固定しているのか？ なぜ三シリングとか、二シリングとか、その他の額ではないのか？ もし賃金額の限界が、資本家の意志からも労働者の意志からも独立した経済法則によってきまるものとすれば、ウェストン君はまず第一に、この法則をのべ、それを証明すべきであった。それからさらに、それぞれ一定の時にじっさいに支払われている賃金額は、いつでもかならず必然的な賃金額と正確に一致し、けっしてこれからはなれないということを、

証明すべきであつた。ところが他方では、賃金額の一定の限界が資本家のたんなる意志に、あるいは彼の食欲の限界にもとづいてきまるのだとすれば、それは任意不定な限界である。それには必然的なものはない。それは資本家の意志によつてかえることもできようし、したがつてまた資本家の意志に反してかえることもできよう。

ウェストン君は、自分の理論を証明しようとして、諸君につきのような例をはなした。一つのどんぶりにもられた一定量のスープを一定数の人間がの場合、さじの大きさを大きくしてもスープの量がふえることはない、と。これをきいて私は、メネニウス・アグリッパがもちいたたとえばなしをちょっと思ひだした。ローマの平民がローマの貴族に反抗したときに、貴族のアグリッパは、平民にむかつてこう言つた。貴族という国家の腹が、平民という国家の手足をやしなつてゐるのだ、と。しかし、アグリッパには、ある人間の腹をみたせばほかの人間の手足をやしなえるといふことの証明は、できなかったのである。ウェストン君のほうは、労働者たちがスープをとるとどんぶりのなかには国民労働の生産物全体がはいつてゐるといふこと、彼らがこのどんぶりからもっと多くのスープをとりだすことができないのは、どんぶりが小さいからでも、その中味がすくないからでもなくて、彼らのさじが小さいからにすぎないのだといふことを、わすれていたのである。

どんな工夫によつて資本家は、五シリングとひきかえに四シリングの価値をよこすことがで

さるのか？ 彼の売る商品の価格をひきあげることによつた。では、商品の価格騰貴、あるいはもっと一般的にいつて、価格変動、つまり商品の価格そのものは、資本家のたんなる意志によつてきまるのであろうか？ それとも反対に、この意志が実効をもつには、ある一定の事情が必要なのではないか？ もしそうでないとすれば、市場価格の騰落、そのたえまない変動は、解くことのできないものになつてしまふ。

労働の生産力にも、資本と労働との使用量にも、生産物の価値をはかる貨幣の価値にも、なんの変動もなく、ただ賃金率の変動だけがおこつたものと仮定する場合、この賃金の上昇はどのようにして商品の価格に影響をおよぼすことができるだろうか？ これら商品の需要と供給との現実の比率に影響をおよぼすことによつてのみである。

労働者階級は、全体としてみれば、その所得を生活必需品にいつやしており、またいつやさざるをえないというのが、完全に事実にあつてゐる。だから、賃金率の一般的上昇は、生活必需品にたいする需要の増加をよびおこし、その結果その市場価格の騰貴をよびおこすであらう。この生活必需品を生産してゐる資本家たちは、彼らの商品の市場価格の騰貴によつて、賃金上昇のうめあわせができるであらう。しかし、生活必需品を生産してゐないほかの資本家たちはどうか？ しかも諸君は、彼らの数がすくないと考へてはならない。国民生産物の三分の二が、人口の五分の一の者によつて——下院のある議員は、最近ではそれは人口のわずか七分の一に

すぎないとのべている——消費されていることを考えるならば、国民生産物のうち、ぜいたく品の形で生産されたり、あるいはぜいたく品と交換されたりしなければならぬ部分がどんなに大きいのか、また生活必需品自体のうちでも、召使や馬やねこなどに浪費されなければならぬ量がどんなに大きいのか——この浪費は、われわれが経験から知るところでは、生活必需品の価格があがるにつれていつもいちじるしくきりつめられるものであるが——、諸君にはよくおわかりのことと思う。

さて、生活必需品を生産していない資本家たちの状態はどうであろうか？ というのは、賃金の一般的上昇の結果彼らの利潤率が低下しても、彼らは、自分の商品の価格の騰貴によってそのうめあわせをすることはできないであろう。なぜなら、これらの商品にたいする需要はふえないだろうから。「こうして」彼らの所得はへるであろう。しかも彼らはこのへった所得のなかから、まゑと同量の生活必需品を手にいれるには、その価格騰貴のためにまゑより多くを支払わなければならないであろう。しかし、それだけではなからう。彼らの所得はへったのだから、彼らはぜいたく品への支出をすくなくしなければならなくなり、したがって彼らのそれぞれの商品にたいする彼ら相互の需要はへるであろう。そしてこのように需要がへる結果、彼らの商品の価格はさがるであろう。だから、これらの産業部門では、利潤率は、賃金率の一般的上昇に単比例して低下するばかりでなく、賃金の一般的上昇と、生活必需品の価格の騰貴と、

ぜいたく品の価格の下落との複比例で、低下するであろう。

いろいろな産業部門でもちいられる諸資本の利潤率にこのようないがあることは、どんな結果をもたらすだろうか？ もちろん、それは、どんな理由にせよいろいろな生産部門で平均利潤率にちがいが生じるにいたった場合にいつでも一般にもたらされる結果と、おなじである。資本と労働は、利益のすくない部門から利益の多い部門に移されるであろう。そして、この移動の過程は、供給が、一方の産業部門では需要の増加に比例して増大し、他方の産業部門では需要の減少におうじて減退するまで、つづくであろう。この変化がおこったのちには、一般的利潤率はいろいろな産業部門でふたたびひとしくなるであろう。すべての狂いは、もともと、たんにいろいろな商品の需要供給の比率が変化したことから生じたのであるから、その原因がなくなれば結果もなくなり、価格は以前の水準と均衡とに復するであろう。賃金上昇の結果生じる利潤率の低下は、いくつかの産業部門だけにかぎられないで、一般的なものとなるであろう。われわれの仮定にしたがえば、労働の生産力にも生産物の総額にもなんの変化もおこってはいないのであって、ただあたえられた額の生産物の形がかわっただけであろう。生産物のうち生活必需品の形で存在する部分はまえよりも大きくなり、ぜいたく品の形で存在する部分はまえよりもすくなくなっているであろう。あるいはおなじことになるが、外国産のぜいたく品と交換されたり、その本来の形で消費されたりする部分はまえよりもすくなくなるであろう。